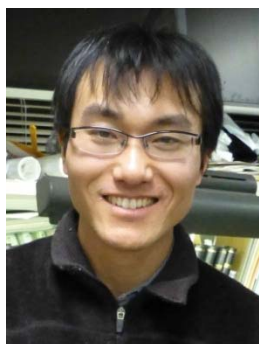


若手研究者の活躍

～ Reaxys PhD Prizeを受賞して 東京大学 宮村浩之先生 ～

2010年のReaxys PhD Prize 受賞者である宮村先生に、受賞後の活動と、いま若手研究者として思うことを語っていただきました。



東京大学大学院 理学系研究科
有機合成化学研究室（小林研究室）

特任助教
宮村 浩之（みやむら ひろゆき）先生

宮村先生の研究テーマを教えてください。

高分子固定化金属ナノクラスター触媒を用いてエネルギー効率や原子効率に優れた有機合成反応の開発を目指しています。

2010年のReaxys PhD Prize 受賞を振り返って

受賞研究の発表はドイツで行われましたが、いかがでしたか？



2010年の受賞者。左から Dr Thomas Maimone、宮村先生、Dr Robert Phipps

国際学会での発表の経験がそれまでではなく、しかも口頭発表だったので事前に練習を積んで臨みました。その甲斐あってか、当日は楽しんで発表できましたし、その後も国際学会で楽しんで話せるようになりました。心配していた質疑応答も専門分野のものがいくつかだったので問題ありませんでした。また、国際学会は学会外のアクティビティも盛んで、交流する機会に恵まれました。ネットワークづくりにはこういったことに参加することも大切ですね。

受賞後はどのような面で変化がありましたか？

初めて会う人に声をかけられるようになったことが、驚きでもあり大きな変化でした。海外の学会でも声をかけられることもあり、ネットワークづくりに役立っています。あとは、製薬会社などに就職された先輩などから「おめでとう」と声をかけていただけたのも大変嬉しかったです。賞をもらえるということは、自分が面白いと思ったことを他の人も評価してくれているということで、自分の研究の重要性を再認識することができました。まわりでも変化がおきていて、私の研究室からもよい研究をして Prize へ応募したいという学生さんが育っています。指導している学生さんにとっての身近な目標となったようで、学生さんのモチベーションを上げることができました。

講演を依頼されることも増えましたか？

はい。2013年1月に行われた Reaxys Lecture^{*1}を含め、そのような機会が増えました。

*1: Reaxys PhD Prize 受賞者の講演会を国内で初めて開催。第9回平田メモリアルレクチャー（至名古屋大学）併設。イベント詳細はこちら。
(<http://japan.elsevier.com/news/events/rx2013/>)

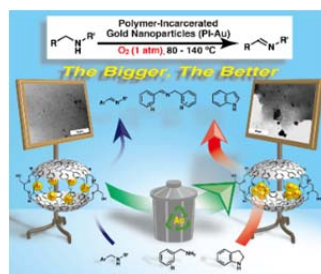
Reaxys Lecture の講演

宮村先生は唯一、過去の受賞者からのご発表でした。

はい。ほかの2講演者は、今年受賞された方たちでしたので、受賞の元となった研究内容を発表されていましたが、私は受賞してから3年を経っていましたので、その後受賞した研究がどのように発展したかも含めてお話をさせていただきました。そういった意味では、一味違った内容に仕上がっていたのではないかと思います。

平田メモリアルレクチャーの講演者からも質問が活発にでていましたね。

はい。常に、聞いている人にわかりやすいように工夫しています。たとえば、話の構成の組み立てはもちろんですが、直感的に理解できるグラフィックス、アニメーションなども使って、誰もがわかりやすいようなプレゼンテーションを心がけています。練習も欠かせません。学部生のときから小林修先生にプレゼンテーションにおけるスライドの構成や印象に残る話し方などを熱心にご指導いただいています。何を一番伝えたいのか、そのためにはどこにプレゼンテーションのピークやクライマックスをもっていきたいのか、なども意識しています。グラフィックスを作るのが好きで楽しみの一つでもあります。わかりやすいグラフィックスをつけると、雑誌のフロントカバーや、インサイドカバー、バックカバーなどに取り上げられる機会も増えます。日本化学会の Bulletin of the Chemical Society of Japan のフロントカバーになったときにはとても嬉しかったですね。



BCSJに掲載された
宮村先生のグラフィックス

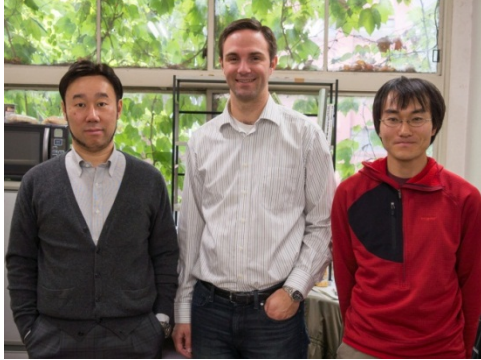
Reaxys Prize Club について

Reaxys PhD Prize 受賞者とファイナリストで構成される Reaxys Prize Club での活動について教えてください。

私が受賞した2010年は初年で45名でしたが、賞も回を重ねて現在は135名に広がりました。メンバーにはいろいろな特典があるので、

それらを活用して幅広い交流が生まれています。

スタンフォード大学 Trost Research Group の David Michaelis さんが、Prize Club の特典であり、Club メンバー間の交流を促進させるためのプログラムである Travel Bursaries を使って私の研究室を訪ねてくれたこともそのひとつです。



小林修教授、Davidさんと3人で記念撮影。

Davidさんは、私が受賞した年のファイナリストのひとりなのですが、ドイツでの私の発表を聞いて私たちの研究に興味を抱き、このプログラムに応募してくれました。滞在の1週間、小林研究室は彼にとってディズニーランドのようにエキサイティングな場所だったようです。実際、触媒をみて「ミッキーマウスだ！」と喜んでいました(笑)。

1週間でどんなことをされたのですか？

小林研究室で開発している高分子固定化金属触媒の技術を学びたいということが彼の目的だったので、現在はいろいろな種類の触媒を開発しているのですが、そのほとんどすべてを見て聞いて自ら実験して学んでいきました。たとえば、分析方法や論文の実験項に書いてあるだけではわからない細かい Tips などを持ち帰って他に応用したいと言っていました。彼の行動力には驚かされました。私も見習いたいと思います。滞在中には、東京大学理学部化学科でも講演を行っていただきました。



Reaxys Prize Club のミーティングも開催されました。

Reaxys Lecture の前日に行われたミーティングは日本在住者のみなさんが中心で和気あいあいとした会でした。中には初めてお会いした方もいてネットワークも広がりましたし、この時に、東京医科歯科大学の隅田先生から、3月に彼の研究室で開催する講演の依頼をいただいたりと、いろいろな交流がありました。

大変いいお話ですね。ぜひ後日詳細を教えてください(※次号の Reaxys Newsletter にて報告予定です)。

宮村先生には今年9月に行われる Reaxys シンポジウムの Committee メンバーも務めていただいていますね。

私のような若い研究者でこのような実行委員会のメンバーになれるチャンスはめったにないので、応募しました。Committee の仕事とし

ては、投稿されたアブストラクトのレビューやカンファレンスのテーマや時間割決め、プレナリーやキーノートについてのディスカッション、実際に講演いただく先生方とのコミュニケーションなど、多岐に渡り、将来学会を運営するときに気を付けるポイントなど、実地で学べて大変良い経験になっています。

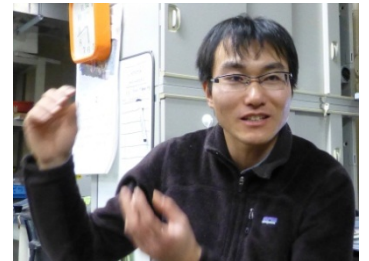
博士から教員へ 教える立場から思うこと

教わったことで、大事にしていることを教えてください。

研究をして結果を出すことはもちろん重要ですが、その結果を発表し多くの人に知ってもらうことも重要です。先ほどの話にも少し出しましたが、わかりやすいプレゼンテーションは、とても大事だと思います。聴衆がどんな人たちか、たとえば広い分野から集まってくるのか、それとも専門分野の人たちなのか、それによって内容や構成、どの程度背景説明のイントロダクションが必要なのかなどが大きく変わってきます。わかりやすい内容や説明はもちろんのこと、聴いてくださる人に興味を持ってもらうためのパフォーマンスも大事です。プレゼンテーションの基本ですが、聴衆とアイコンタクトをとり、身振り手振りでもアピールしますね。

練習する機会も大切ですね。

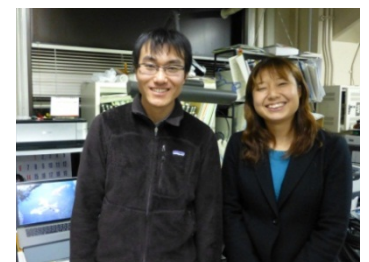
そのとおりです。小林研究室では、全員が週一回グループミーティングで、月一回研究報告セミナーで、半年に一回文献紹介セミナーで英語の発表をする機会が設けられています。文献紹介セミナーでは研究室のスタッフが、発表内容に加えてプレゼンテーションの姿勢や話し方などについてもアドバイスします。私を含め教員も発表しますので、お手本となるような発表を心がけています。



内容もかなり充実していそうですね。

もちろんです。文献発表の基本はやはり文献を読み込むことなので、多くの文献をしっかりと読み込むことは欠かせません。最近はいくつかの便利なデータベースもあるので、概観をしっかりと把握したり、テーマのつながりをたどりながら関連文献を探したりといろいろ工夫しています。

宮村先生のこれからの益々のご活躍をお祈りしています。ありがとうございました。



東京大学 宮村浩之先生、エルゼビア・ジャパン(株) 齋藤美里(インタビューー) 編集:エルゼビア・ジャパン(株) 恒吉有紀